

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00517

研究課題名（和文）日琉祖語の再建を目的とした同源性タグ・意味タグ付き語彙データベースの構築

研究課題名（英文）Development of a cognacy- and semantic-tagged lexical database for the reconstruction of Proto-Japonic

研究代表者

五十嵐 陽介（Igarashi, Yosuke）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究系・教授

研究者番号：00549008

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題の目的は、同源性および意味の双方で関連付けられた、日琉諸語の比較言語学的研究を促進するための語彙データベースの構築にある。この目的に達するために「日琉語類別語彙」を整備拡張し「危機言語データベース」に登録した。これを用いた研究成果は以下の通りである。動詞の母音に着目して、九州諸方言と琉球諸語が単系統群をなすとする論文を発表した。琉球祖語のアクセント類を再建する論文を発表した。琉球祖語と日本語との間のアクセントの特徴的な対応が日琉祖語の語形成に起因するとする説を学会で発表した。非中央語が系統的な位置づけに関する発表を行った。比較言語学の概説書を共著者とともに出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代日本語の姿がいかなるものであったのかという問いは人々の興味を引くものである。現在の日本語と琉球諸語の共通祖先である日琉祖語は、古墳時代に分岐しはじめたとされており、その祖語がどのような姿であったか、千年数百年の歳月を経て現在の多様な言語体系へとどのように変化してきたのかを明らかにするためには、比較言語学的手法が必要不可欠である。比較言語学的研究の進展には、日琉諸語の利用可能なデータを検索可能な形で整理し、データベース化することが必要である。本研究課題はそのようなデータベース開発を推進するものであり、その成果は国立国語研究所の「危機言語データベース」の一環として広く公開されている。

研究成果の概要（英文）：The objective of this project is to construct a lexical database annotated with both cognacy and semantic tags, aimed at facilitating comparative linguistic research on Japonic languages. To achieve this goal, I have developed and expanded the "JR-COGNATES" database and registered it in the "Database of Endangered Languages of Japan." The outcomes of my research utilizing this database are summarized as follows: 1) I have published a paper focusing on the vowel systems of verbs, proposing that Kyushu dialects and Ryukyuan languages constitute a monophyletic group. 2) Another paper of mine reconstructs the accent patterns of Proto-Ryukyuan. 3) I presented a conference paper advancing the theory that the distinctive accent correspondences between Proto-Ryukyuan and Japanese are attributable to proto-Japonic word-formation. 4) I delivered a talk on the phylogenetic classification of non-central Japonic varieties. 5) I co-authored a book providing an overview of comparative linguistics.

研究分野：言語学 音声学 歴史言語学

キーワード：比較言語学 日琉諸語 琉球諸語 語彙データベース 系統 アクセント 日琉祖語 琉球祖語

## 1. 研究開始当初の背景

日本列島の諸言語・諸方言は(アイヌ語を除いて)日琉語族をなし、日琉語族は日本本土で行われる日本語派と、琉球列島で行われる琉球語派という2つの系統群に大別される(Pellard 2015)。現代の諸方言が分岐発達する以前の言語体系すなわち祖語の姿を推定する作業は比較再建と呼ばれる。日琉祖語を再建するこれまでの研究には、中央語偏重、アクセント偏重、不完全な構造化という問題がある。

**中央語偏重:** 日琉祖語の再建は少数の主として国外の研究者によって行われてきたが(Martin 1987; Frellesvig and Whitman 2008, Vovin 2011)、定説的な見解は存在しない。再建に中心的な役割を演じるデータは、文献に残された中央語(京都・奈良を中心とする近畿地方の方言)であり、非中央語系統の諸方言のデータは重要視されない。近年急速に発展した琉球諸語研究からの知見が取り入れられ始めたのはごく最近である(Pellard 2013)。五十嵐(2021)が強調するように、琉球語諸方言だけでなく(本土)日本語の非中央語系統の諸方言には、祖語の再建に重要な役割を演じる多様性が観察される。非中央語系統の諸方言の最新データは日琉祖語を再建する研究を大幅に前進させる可能性を孕んでいる。

**アクセント偏重:** 一方国内では、非中央語系統の諸方言の比較に基づいた再建が行われているが(上野 2006; 松森 1993)、再建の対象はアクセント体系に限定されている。服部(1978)以来、分節音(母音・子音)を含めた語形全体を再建する本格的な試みは国内の研究者によって行われていない。早田(2017)は例外であり分節音が再建されているが、その手法は中央語の文献資料に基づく内的再建であり、非中央語系統の諸方言の扱いは周延的である。分節音の変化はアクセントの変化と連動することがあり、対立するアクセント型の数の増減をもたらすこともある。分節音の再建を本格的に行うことで、祖語のアクセントに関する従来の学説は大幅な見直しを迫られる可能性がある。

**不完全な構造化:** 既存の諸方言語彙データはいかなるものであれ、同源性(cognacy)を見出しとするか(Martin 1987; 五十嵐 2016)、意味を見出しとするか(平山他 1992-93)のいずれかである。そのため、2つ以上の方言において意味変化と音変化の一方あるいは両方を経験した語が、歴史的に同一の語に遡る事実を知ることができない。例えば琉球祖語\*kamatiに遡る語は、琉球語諸方言で「横木」「頭」「頬」「顎」等様々な意味を持つが、これらの語が1つの祖語形\*kamatiに遡る事実は、同源性を示すタグが無ければ知ることができない。また琉球語諸方言では「頭」を表す語が、語源の異なる語(\*kamati, \*tuburu, \*kana-mariなど)で表されるが、これらの語が同一の意味を持つ事実は、共通の意味タグが無ければ知ることができない。祖語から個々の方言への音変化と意味変化の双方を知るためには、個々の方言の語形が同源性と意味の双方に基づいて構造化されていなければならない。

以上から明らかなように、日琉祖語を再建する研究を発展させるためには、文献に残された中央語だけでなく、現代諸方言の語彙・アクセント情報が格納し、それらを同源性と意味の双方によって構造化したデータベースを構築することが有益である。このようなデータベースはこれまで存在しなかった。

## 2. 研究の目的

日琉祖語の再建を目的とした同源性タグ・意味タグ付き語彙・アクセントの電子的データベース『日琉諸語語彙データベース』を構築することを目的とする。

## 3. 研究の方法

手法は以下の通りである。

1. 対象となる既存データ(論文、方言辞典類)を電子化する。
2. 「同源性タグ」と「意味タグ」を開発し付与する(表1)。
3. 祖語の語形とアクセントを再建する。
4. インターネットで公開する。

1の既存データは中央語(文献含む)と現代諸方言のデータであり、これを電子化する。2の

「同源性タグ」の開発には専門的な知識が必要であるが、応募者は『日琉語類別語彙』(五十嵐 2019)の開発を通じてすでに 1800 項目以上の同源性タグを定義しているため、このタグを利用することができる。「意味タグ」は新たに開発する必要がある。Swadesh (1952)の基礎語彙における 207 項目を必ず含むこととして、また『現代日本語方言大辞典』(平山他 1992-93)の項目、『日本語地図』(LAJ 1966-74)の項目を参考にして 1000 程度の意味タグを作成する。このようにして作成されたデータに基づいて祖語を再建する(3)。最も包括的に祖語を再建した研究に Martin (1987)があるが、データに基づきこれを批判的に検討する。構築されたデータベースのうち権利関係上公開が可能なものは公開する(4)。

#### 4. 研究成果

新たに電子化されたデータをもとに『日琉語類別語彙』(五十嵐 2016)を整備、拡張し、再建されたアクセント類とともに、国立国語研究所が公開している「危機言語データベース」の「日本の消滅危機言語語彙 DB」(<https://kikigengo.ninjal.ac.jp/data/tango/search>)の一環としてこれを一般に公開した。「日本の消滅危機言語語彙 DB」は、UniCog (Celik et al. 2024)と呼ばれる同源性のタグによって、日琉諸語の語彙データが構造化されているので、これと『日琉語類別語彙』を融合させることによって、「日本の消滅危機言語語彙 DB」を、日琉祖語を再建することを目的とした研究データとして、有効に活用することが可能になる。

同源性によるデータベースの構造化については、「日本の消滅危機言語語彙 DB」構築との協働によってその目的を達することができたが、意味による構造化は十分には行われていない。しかしながら、「日本の消滅危機言語語彙 DB」には各言語変種における各語彙項目の意味が記述されているためにこれを利用して、比較言語学的研究を促進することができる。

このような形で構築されたデータベースを活用した研究成果は以下の通りである。

琉球祖語のアクセント類を再建する論文を発表した (Igarashi 2022)。日本語のアクセント類のうち 2 拍 4 類・5 類の一部は琉球祖語の B 類に残りは C 類に対応することが知られていた。この分裂対応は日琉祖語のアクセント類を再建するために重要である。しかし 2 拍 4 類・5 類に属する語(約 100 語)のうち、琉球祖語におけるアクセント類が確定しているのはその一部に過ぎなかった。本論文は琉球諸語におけるアクセント型の対応の検討に基づいて、75 語のアクセント類を確定した。

さらに、上で述べた琉球祖語のアクセント類に関する成果 (Igarashi 2022)に基づいて、琉球祖語と日本語との間のアクセントの特徴的な対応が日琉祖語の語形成に起因するとする新説を国内学会で発表した (五十嵐 2022a)。

琉球諸語、九州諸方言、八丈語、東日本諸方言を非中央語と位置づけ、非中央語が日琉語族の中でどのような系統的に位置づけられるかに関する発表を行った (2022b)。

九州諸方言の動詞活用パラダイム(上二段活用)に現れる母音に着目して、日琉祖語の母音に生じた音変化を再建し、同じ音変化を九州諸方言と琉球諸語とが共有していることを示し、九州諸方言と琉球諸語が単系統群をなすことを主張する論文 (五十嵐 2023)を発表した。

日琉諸語のデータに基づいた比較言語学の概説書を共著者とともに出版した (平子他 2024)。平子他 (2024)は日琉諸語のデータに基づいた初めての比較言語学の概説書であり、日琉諸語比較言語学の最新の成果を取り入れている。この書籍の出版によって、国内の日琉諸語比較言語学の研究が促進されることが期待される。

#### 引用文献

- 五十嵐陽介 (2016)「アクセント型の対応に基づいて日琉祖語を再建するための語彙リスト「日琉語類別語彙」」『日本語学会 2016 年度春季大会予稿集』, 233-238 .
- 五十嵐陽介 (2021)「分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み」木部暢子・林由華・衣畑智秀 (編)『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』17-51, 東京: 開拓社.
- 五十嵐陽介 (2023)「現代九州諸方言における旧上二段動詞の「下二段化」は九州・琉球祖語仮説を支持するか?」『言語研究』: 1-31.
- 五十嵐陽介 (2022a)「2 音節名詞第 4/5 類に対応する琉球祖語 B 類は改新であるとする仮説」『日本語学会第 164 回全国大会予稿集』(2022 年 6 月 19 日日本語学会) .
- 五十嵐陽介 (2022b)「琉球語・八丈語以外の非中央語系ジャポニック諸語の系統」言語系統樹ワークショップ (沖縄: 沖縄県立博物館・美術館)
- 上野善道 (2006)「日本語アクセントの再建」『言語研究』130, 1-42.
- 服部四郎 (1978)「日本祖語について (8-9)」『月刊言語』7(10), 94-103, 7(11), 108-117.
- 早田輝洋 (2017)『上代日本語の音韻』東京: 岩波書店.
- 平子達也・五十嵐陽介・トマペラール (2024)『日本語・琉球諸語による歴史比較言語学』岩波書店.
- 平山輝男・大島一郎・大野真男・久野真・久野マリ子・杉山孝夫 (1992-93)『現代日本語方言大

- 辞典』東京：明治書院。
- 松森晶子 (1993) 「日本語アクセント祖体系再建の試み—いわゆる「下降式アクセント」の成立に関する考察をもとにして—」『言語研究』100, 37-91.
- Celik, Kenan, Kohei Nakazawa, and Reiko Aso (2024) “UniCog: A Framework Proposal for the Dynamic Compilation of Comparative Data for the Reconstruction of proto-Ryukyuan,” *NINJAL Research Papers* 26: 69-97.
- Frellesvig, Bjarke and John Whitman (2008) “Evidence for seven vowels in proto-Japanese,” *Proto-Japanese: Issues and Prospects*, ed. by Bjarke Frellesvig and John Whitman, 15–41, John Benjamin.
- Igarashi, Yosuke (2022) “Reconstruction of Ryukyuan tone classes of Middle Japanese Class 2.4 and 2.5 nouns” *Open Linguistics* 8(1): 232-257.
- LAJ (1966-74) 『日本言語地図』全6巻, 国立国語研究所 (編), 東京: 大蔵省印刷局.
- Lee, S. & T. Hasegawa (2011) “Bayesian phylogenetic analysis supports an agricultural origin of Japonic languages,” *Proceedings of the Royal Society, Biological Sciences*, 278(1725), 3662–3669.
- Martin, Samuel E. (1987) *The Japanese Language through the Time*. London: Yale University Press.
- Pellard, Thomas (2013) “Ryukyuan perspectives on the proto-Japonic vowel system,” *Japanese/Korean Linguistics* 20, ed. by Bjarke Frellesvig and Peter Sells, 81–96, CSLI Publications.
- Pellard, Thomas (2015) “The linguistic archeology of the Ryukyu Island,” *Handbook of the Ryukyuan Languages: History, Structure, and Use*, ed. by Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, Michinori Shimoji, 14–37, Berlin: DeGruyter Mouton.
- Saitou, Naruya and Timothy A. Jinam (2017) “Language diversity of the Japanese Archipelago and its relationship with human DNA diversity,” *Man in India*, vol. 97, no. 1, 205–228.
- Swadesh, Morris. (1952). “Lexicostatistic Dating of Prehistoric Ethnic Contacts,” *Proceedings of the American Philosophical Society*, Vol. 96, 452–463.
- Vovin, Alexander (2011) “On one more source of Old Japanese i2,” *Journal of East Asian Linguist* 20, 219–228.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 五十嵐 陽介	4. 巻 163
2. 論文標題 現代九州諸方言における旧上二段動詞の「下二段化」は九州・琉球祖語仮説を支持するか？	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語研究	6. 最初と最後の頁 1~31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11435/gengo.163.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Igarashi Yosuke	4. 巻 8
2. 論文標題 Reconstruction of Ryukyuan tone classes of Middle Japanese Class 2.4 and 2.5 nouns	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Open Linguistics	6. 最初と最後の頁 232~257
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/opli-2022-0193	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Igarashi Yosuke	4. 巻
2. 論文標題 Prosodic phrasing, long-distance rise, and structural prominence-marking in Japanese dialects without lexically contrastive tones	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Prosody and Prosodic Interfaces (Oxford University Press)	6. 最初と最後の頁 282~297
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/oso/9780198869740.003.0010	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yosuke Igarashi;Junko Hirokawa	4. 巻 22
2. 論文標題 Corpus of Japanese Telephone Conversation at Hiroshima University: Design and Current Status	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 NINJAL Research Papers	6. 最初と最後の頁 113-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00003516	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 五十嵐 陽介	4. 巻 1
2. 論文標題 南琉球宮古語池間方言の疑問文イントネーション	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日琉諸語の記述・保存研究	6. 最初と最後の頁 24～42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15084/0002000046	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 五十嵐陽介	4. 巻 9
2. 論文標題 諸方言アクセント研究における定量分析 「聞こえる・聞こえない」の水掛け論からの脱却	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 5-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件(うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Yosuke Igarashi
2. 発表標題 Controversy about the phylogenetic position of Kyushu and Ryukyuan languages: Current situation and future prospects
3. 学会等名 The Origin and Spread of the Japonic Languages: Putting Together Linguistics, Genetics, and Archaeology (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 日琉祖語四声仮説: 最少の声調と最少の音変化でアクセント体系の多様性を説明するために
3. 学会等名 第4回プロトジャポニック研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 琉球語・八丈語以外の非中央語系ジャポニック諸語の系統
3. 学会等名 言語系統樹ワークショップ
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究
3. 学会等名 NINJALシンポジウム「言語資源学の創成：開かれた言語資源による日本語研究」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 南琉球宮古語池間方言の疑問文イントネーション
3. 学会等名 2022年度第2回合同研究発表会「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究
3. 学会等名 Evidence-based Linguistics Workshop
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 日本語韻律ラベリング体系「簡易版X-JToBI」の有用性と諸方言への応用
3. 学会等名 社会言語科学会第4回シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 2首節名詞第4/5類に対応する琉球祖語B類は改新であるとする仮説
3. 学会等名 日本言語学会第164回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 『九州方言音調研究』のこれまでとこれから」についてのコメントと質問
3. 学会等名 第35回日本音声学会全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 「日琉諸語の疑問・不定表現をめぐる韻律現象：類型論的枠組みの提案と通時的考察」について
3. 学会等名 日本言語学会第 163 回大会
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 南琉球宮古語池間方言における韻律的単位「韻律語」の特性
3. 学会等名 第167回日本語学会大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 窪園晴夫、野田尚史、ブラシャントバルデシ、松本曜[編]、窪園晴夫、五十嵐陽介、秋田喜美、野田尚史、井戸美里、山本秀樹、ブラシャントバルデシ、松本曜・鈴木唯・高橋舜・谷川みずき・長屋尚典・吉成祐子、田中雄、岸本秀樹、窪田悠介、守田貴弘[著]	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 328
3. 書名 日本語研究と言語理論から見た言語類型論（担当箇所：「日本語諸方言のイントネーションと言語類型論」）	

1. 著者名 林由華、衣畑智秀、木部暢子[編]、林由華・衣畑智秀、ペラルトマ、五十嵐陽介、平子達也、斎藤成也、狩俣繁久・和智仲是・木村亮介、村脇有吾、衣畑智秀、ローレンスウエイン、佐々木冠、金田章宏、木部暢子[著]	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 316
3. 書名 フィールドと文献からみる日琉諸語の系統と歴史（担当箇所：分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み）	

1. 著者名 平子達也、五十嵐陽介、トマペラル	4. 発行年 2024年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 156
3. 書名 日本語・琉球諸語による歴史比較言語学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------